

浅野一郎先生に贈ることば

佐々木 一 隆

長年にわたって宇都宮大学の発展に貢献されてきた、そして私たち後輩の教員をご指導・ご鞭撻くださった浅野一郎先生が2013年3月に定年退職される。大黒柱を失う気持ちである。ここに先生との思い出を振り返りながら、感謝のことばを贈りたい。

浅野先生との出会いは私が大学院生だった30年程前にさかのぼる。上智大学で毎月行われていた東京英語学談話会で初めてお目にかかったと思う。以来、研究の場でお会いすることが多く、いろいろとお世話になってきた。

当時で印象に残っているのは、談話会のメンバーによる読書会でご一緒させていただいたことである。Susan Tavakolian が編集した *Language Acquisition and Linguistic Theory* (The MIT Press, 1981 年) という本を読む機会があった。言語獲得と言語理論の関係について初めて体系的に論じたこの研究報告集の学問的意義は大きかったが、執筆者のファミリーネームになぜか変わったものが多く、編者の Tavakolian をはじめ Goodluck や Lust などが挙げられ、ちょっとした話題になった。Solan もその一人で昭和40年代はじめに人気だったテレビ漫画の主人公の名に似ていた。読書会の休憩時間だろうか、先生はそのテーマソングを口ずさまれた。茶目っ気のある方だと思った。また、1987年に私が宇都宮大学に赴任して間もない頃に談話会の場でご挨拶をした時のことも印象に残っている。いつもながら一見こわそうな面持ちだったので緊張したが、にっこりと優しく微笑んで受け答えていただき、ほっとしたことを記憶している。

その後も、こうした人柄の先生が、Chomsky や Pinker の専門書を手にしているお姿を学内外で何度もお見かけした。悠然とした研究者の雰囲気も伝わってきたのである。先生に拙論を進呈することもこれまでに何度かあったが、そうした時にもさりげなく読んでくださり、ひとことでの的を射たありがたい感想やコメントをくださった。昨年末のことであるが、大塚英語教育研究会の輪読会で Chomsky の *Aspects* の第4章について近々発表する話をしたところ、「どこで切るかだね」と含蓄のある示唆をひとこといただいた。このようなご発言ができるのは、やはり先生が学生時代より現在に至るまで研究を続けて来られ、論文や著書も書いて来

られた顕著なご実績があったからである。すなわち、*Studies in English Linguistics* や『英語青年』などの学術誌に寄稿された学術論文、大修館から出版された『照応と削除』や、研究社から出版された『言語研究入門：生成文法を学ぶ人のために』などのご業績があったからである。

浅野先生が教育の面でも多大な貢献をされたのは言うまでもない。教育学部英語科のリーダーとして、特に英語学の中心教授として学生指導に当たられ、多くの優秀な卒業生を教育界に送り出して来られた。このことは所属学部の異なる私でも垣間みることができる。先日國學院栃木高校に訪問した際に、先生の教え子に二人お会いした。学年主任を務める指導者と中堅で活躍する英語教員の方々に先生のことが話題になったが、同時にご指導の成果を確認することができたのである。そして奇しくも定年を迎えられる今年度後期に、宇大基盤教育の *Advanced English I (Communicative Grammar)* の授業を一緒に担当させていただき幸運に恵まれ、教育に対する姿勢を改めて学ぶこともできた。

先生は組織運営でも幅広く活躍された。たとえば、学術協定校のカリフォルニア州立大学ロサンゼルス校に当時の学長だった貴志浩三先生が訪問される際に同行したことが挙げられる。2001年のことで国際交流の面でも大きな貢献をされたことになる。また、職員組合の重鎮として、宇大職員組合執行委員長を何度も務め、全大教中央執行委員会副委員長も歴任され、その関係でテレビにも出演して大学の労働環境の向上に尽力された。泰然と構える親分肌の先生だからこそ成せた業である。

大黒柱の浅野一郎先生が間もなく宇都宮大学を退職されるのは大変に残念である。何か起こった時に先生の堅実なご判断をすぐに仰ぐこともできなくなる。寂しいかぎりである。教育と研究の場としてますますその厳しさを増す現在の宇都宮大学であるが、今後も少し離れたところから私たちをご指導いただければ幸いである。

筆を置くにあたり、先生のご健勝とますますのご発展をお祈りいたします。浅野先生、長い間本当にありがとうございました。